

機動戦士ガンダム0083  
SQUIGS MEMORY  
Anecdote

The phantom's memory  
—亡霊の記憶—

他人のために暮らすのはもうたくさんだ。  
せめてこのわずかな余生をみずからのために生きようではないか。

Michel Eyquem de Montaigne

The phantom revives.  
1 亡霊は蘇る

Universal Century 0083-11-8  
宇宙世紀0083年11月8日

Greenwich Mean Time 12:01

グリニッジ標準時12時1分

Solomon sea operation region  
ソロモン海作戦域

Principality of Zeon Force CC-108 "Solveigs" of Musai-class Cruiser latter term type  
ジオン公国軍 ムサイ級巡洋艦（後期型）“ソルヴェイグ”

ジオン公国軍のムサイ級巡洋艦は、艦形の小ささに比べ、艦橋に異例とも言えるスペースを割いている。宇宙という他に逃げ場のない場所、そして、そこでしか生きられない人間が造ったからこそその構造といえた。

現在、ソロモンにほど近い宙域に展開しているソルヴェイグの艦橋も、その例に漏れず、広い床面積を持つ。

もっとも、艦橋の空気は通信士が命令を読み上げた直後から、息苦しさを感ずるほどの緊張感に包まれていた。空気循環用のファンの音が嫌に耳についた。

沈黙は数秒。艦長席の傍らで、副長テオドール・ワイセンベルガーが呻く。痩せ過ぎた体軀から、やや甲高い声が絞り出された。

「我々に死ぬと言うのか！ ……艦長！」

さらに言いつのるより、艦長席からの叱咤が先であった。

「落ち着け副長。命令は命令だ」

野太い声であったが、粗野な印象は受けない。艦長席の男は、ゆっくりと立ち上がった。

そして、通信士へと向き直る。自然に通信士の背筋が伸びた。

「通信士、すまないが電文をもう一度読み上げてくれないか？」

「——は！」

『発：パールギュント “バルフィッシュ”

宛：ソルヴェイグ “ファントム”

司令部より入電。我が艦隊は明日1200をもってS宙域に進出。「星の屑」最終段階を決行する。“ソルヴェイグ”は敵哨戒部隊の陽動に当たるべし。“現有戦力”をもってE-15・18・25フィールドへの敵の誘引・撃破を主任務とする。尚、配属された機体は消耗も止む無し。大義は我等に有り。幸運を祈る！』

以上であります！」

艦橋のメイン・スクリーンが電子音と共に切り替わる。戦術データ・リンクが旗艦からのレーザー通信を受信し始めたのだ。元々貧弱なレーザー通信システムしか持たなかったソルヴェイグであるが、一年戦争終盤、機転を利かせた技術士官が、大破したゲルググからレーザー通信システムごとモノアイ・システムを移植してある。それからは、ミノフスキー粒子濃度が高い中でも比較的良好な通信・情報収集が可能になっていた（それこそが

ソルヴェイグが終戦後も生き残れた理由でもある)。

グラモニカ製のモノアイ・システムは、旗艦からのデータを飲み込んでいく。メイン・スクリーンには、CG合成された自艦、味方艦の位置、想定される敵艦の動き、そして、最後に担当宙域が表示されていった。サイコロの様に切り分けられた宙域の一角、ソルヴェイグが割り当てられた宙域は、優に標準的なコロニー3基程度を浮かべるに足る広さを有している。

その様子を拳を握り締めながら見つめていた副長は、踵を返すなり艦長席の前に立ちほだかった。

「ザク一機でこの広さをカバーしろと言っているのですぞ！」

副長が指し示すサブ・スクリーンが、ソルヴェイグの格納庫の様子を映し出した。3年ぶりに <sup>ソルヴェイグ</sup>彼女 が受け入れたただ一機のMS。

——MS-06F2

傑作機MS-06F、いわゆるザクの後期生産型である。元となった初期生産型よりも、対MS戦闘用に設計された機体ではあるが、元となった機体設計が古すぎる。それ以前に、一機でこれほどの宙域を駆け回るなど、無理を通り越して無謀であった。

「副長、だからこそ、我々にこの任務が回ってきたのだ」

艦長は軽く床を蹴ると、無重力にその身を任せる。天井や壁の配管やハンドルを器用に使うと、既に彼の身体は艦橋の出入り口まで移動していた。

「格納庫へ向かう、テオドール副長、別命あるまで待機！ 周囲の警戒を厳にせよ！ それから、非番の時に悪いがハインツを起こしてくれ。あいつが居ないと仕込みが出来ん」

そう言うなり艦長はハッチの開放パネルに触れる。圧縮空気が漏れ出す音と共にハッチが開いた。リフト・グリップを握る艦長の背中に副長が慌てた様に声をかける。

「艦長！ まさか自ら！？」

振り向きもせず、艦長は応えた。

「艦長席は座り心地が悪くてな。なに、俺はもう“<sup>あの椅子</sup>亡霊”だ。それに……」

一呼吸おくと、艦長はゆっくりと続けた。

「俺は、もう二度とあの<sup>ア・バオア・クー</sup>地獄を繰り返したくない……」

再び圧縮空気がはき出されると、ハッチはなめらかに閉じられた。

副長は、艦長の気持ちが良く理解できた。

そして、今度は自分が艦長と同じ思いを抱えるのではないかと……と。

そう思ったのである。

2 The PHANTOM of The OPERA  
オペラ座の怪人

Universal Century 0083-12-31 Time is uncertain.  
宇宙世紀0080年12月31日 時刻不明

Space fortress A BAOA QU The vicinity of E-field boundary  
宇宙要塞ア・バオア・クー Eフィールド境界付近

司令部からの指揮系統の停止、自由行動の命令が下り、果たして何時間経過したのか、月の裏側を臨むこの宙域は、未だ熱を帯びている。本国からの停戦命令は、連邦軍の猛追撃の前に有名無実となり、ただ生き残るための戦いが、各所で繰り広げられていた。

遠方で今だ閃光とビームが煌めく闇の中、ジオン公国軍特有のモノアイを猛々しく輝かせ、一機の高機動型ザクが猛然と宇宙を駆けていた。その機体は昏い朱と黒を基調とした塗装に包まれ、だが、モノアイを覆う頭部だけが不気味に白かった。右肩のシールドには、機体を象徴するその白い頭部そのままに一つ目の亡霊の仮面が描かれている。仮面の下には流麗な筆記体が刻まれていた。

— PHANTOM of The OPERA

気障に過ぎる程、過剰な装飾で戦場に浮かび上がったその機体は、敵の目を引きつけずには居られなかった。そして、其れこそがこの機体の目的であり、もうひとつは、パイロットの戦争に対する——その悲慘さへの抵抗であった。

ザクの背後には連邦軍モビルスーツがびたりと張り付き、物量を誇るかのような乱射を始めた。しかし、ザクは不規則噴射で全弾を回避しする。さらに、両手・両足を振り上げる機動に、脚部サブ・スラスターからの逆噴射で敵を追い抜かせた。慌てた敵機が振り返る間も取らせず、そのランドセルに向けて右マニピュレーターのマシガン<sup>AMBAC</sup>を正確に三発だけ叩き込む。さらに、後ろから追いついてきた球体状の敵モビルポッドを蹴り飛ばすと、止めは刺さずに僚機を振り返った。同時にモノアイを通じたレーザー通信が発せられる。「今だ！ あのモビルポッドを狙え！」

覚束ない動きでザクに従っていたのは、三機のゲルググ<sup>MS-14A</sup>であった。どの機体もぎこちなさの残る機動で散開すると、操縦不能に陥っている敵機を目がけ、それぞれに狙いをつけた。

三機ほぼ同時にマニピュレーターがビームライフルのトリガーを引き絞ると、縮退寸前でチャージされていたミノフスキー粒子が、銃身内のIフィールドにより縮退、膨大なエネルギーと変わり、銃口から吐き出される。ビームは超高温の光となり、哀れな敵兵へと向かった。

敵機による死に物狂いの姿勢制御により、一発目は僅かに逸れ、ビーム粒子が装甲板を焼くに留まった。しかし、ようやく回転を止めた敵へと二発目、三発目はほぼ同時に着弾。両側からビームに貫かれた機体は、即座に爆散した。

『やった！』

『すげえ！』

『撃墜したぞ！』

まだ若い声がゲルググの通信機から流れていた。その声は、純粋な喜びに満ちている。

「馬鹿野郎！」

だが、ザクのパイロットは若人たちに冷や水を浴びせかけた。

「まだ敵は追ってくるぞ！ 母艦の直援だと言うことを忘れるな！」

ゲルググたちの動きが引き締まる。

「待機位置へ復帰するぞ！ ハンス、お前が先頭だ。全機周囲の警戒を怠るな。ライフルの残弾数もだ！ エネルギーが切れそうなら直ぐに腰に付けてやったザク・マシンガンに持ち替える！ 最後の二、三発を大事にとって置いて死ぬんじゃないぞ！」

「了解！」

ゲルググたちは直ぐに、と言うには少しばかりの時間が掛かったものの、どうにか編隊と呼べる形を作ると、護衛目標の巡洋艦ムサイ近辺へと戻っていく。艦は無惨に傷つき、左右に突き出したエンジンのうち右側はもうもうと煙を引いていた。

ザクは損傷したエンジンを気遣うように付近を遊弋すると、編隊の殿についた。コックピット内では、パイロットが通信マイクを切るなり毒づいていた。

「ったく……これではガキのお守りだ！ 学徒兵を戦争に使わなければならんとはな！」

ヘルメットに描かれたファントム・マスクのマーキングを撫でる。畜生、この派手な装飾が役に立ってるうちは良いが、敵さんが“ヒョッコ”に気づいたら……。

考えても意味のない思考は直ぐさま外へ追いやると、今度は母艦へと通信回線を開く。

「こちらオペラ座の怪人、クリスティーヌ！ 健在か？」

打てば響く、即座に返信がスピーカに返ってくる。

『クリスティーヌ健在であります！ しかし少佐、このコードネームはいささか浪漫的に過ぎますな』

「婉曲表現で減らず口を叩くだけの余裕はあるようだな。この宙域を脱出したら <sup>ソルヴェイグ</sup>艦名で呼んでやる」

『了解、あと5分は保たせてください。緊急ブースターは残り2回、それで振り切ってみせます。それと——』

「……それと？」

『先に脱出したデラーズ艦隊から再度集結ポイントの指示がありました。変更無し、カラマ・ポイントです。そちらにデータ転送します』

即座にサブモニターにウィンドウが追加される。月とサイド3との中間地点である。

「やはり遠いな……」

『現在の損傷では……難しいと思われます』

少佐と呼ばれた男がコックピットで黙考する。航宙図を呼び出すと、数本のルートを検討し、直ぐに結論を出した。

「仕方あるまい……月へ逃げるぞ。確かANAHEIM ELECTRONICS社がモバイルスーツを欲しがっていたらう」

『了解……家電メーカーに亡命でありますか？』

「その通りだ。作戦計画を艦のデータベースに登録してある。使うとは思わなかったがなA-1568、パスワードはいつもの奴だ。仕込みはハインツに聞け」

『いつものながらの悪巧み、感心いたしますな』

「45年産のワインが俺の私室に残ってる。あれを艦ごと沈められたら、たまらん」

『少佐、独り占めは無しで……おっと！ 後方から不明機！ 敵味方識別装置……反応無』

し！ 単機ですが……速い！』

「何！？」

少佐は機体を素早く回転させると、自身のモノアイに最大望遠をかける。

そこに映し出された連邦軍モビルスーツの“両眼”が猛禽類のように禍々しく光輝く。

「あいつは……！」

敵モビルスーツは両肩のブースターとプロペラントタンクを強制排除、接近と同時に長大なライフルを構えた。銃口には既に縮退した粒子が見える。

「マズいぞ！ 全機散れ！ 回避！」

自身も操縦桿を乱暴に倒すとフットペダルを荒々しく踏み込み、不規則噴射を繰り返す。ソルヴェイグも即座に緊急ブースターに点火し回避行動。

だが、三機のゲルググは違った。突然の事に、ザクやソルヴェイグより動きが数秒だけ遅れる。

「避けるおッ！」

少佐はマイクに叫んでいたが、同時に戦場での勘が間に合わないことを告げていた。

ザクの背中を僅かに逸れながら、連邦特有の赤いビームが通り過ぎていく。

『うわ……！』

通信機が灼ける際に発する特有のノイズと共に、一機のゲルググが光に飲み込まれていく。

「ハンス！ 畜生、お前ら散開しろ！ 急げ！」

慌てて散開するゲルググだが、明らかに動揺してモビルスーツの操縦が直線的になっている。

『ハンスが！？』

通信回路からも困惑した声しか聞こえない。

『あんな速度で！』

「回避に専念だ！ 余計なことは考えるな！」

叫んだところで少佐自身にはこの後が手に取るように分かる。狼狽えているゲルググを先に落とす気だ。敵は無茶とも思える機動性で天頂方向へとメインスラスタを吹かす。間に入ろうにも距離を離されてしまった。ザクも推進剤の残りを気にして控えていたスロットルを限界まで開け、スラスタの推力を絞り出す。モノアイが敵機のビーム光を捕らえ、コックピット内部スピーカーが独特の発射音を再現する。

『ひっ……！』

一射目は牽制、ゲルググが逃げる方向へと二射目、三射目が襲いかかる。

腕を吹き飛ばされ、胴体を貫かれたゲルググは推進剤が誘爆。先に吹き飛ばされた腕だけが闇へと吸い込まれていった。矢継ぎ早に繰り出されるビームは、最後のゲルググへと向かう。

ゲルググは辛うじてそのビームを避けていたが、撃破されるのは時間の問題であった。致命的な着弾は避けているものの、敵のビームはシールドの耐ビームコーティングを一発で蒸発させ、次発がたまたまシールドから手を離れたゲルググの左腕を蒸発させる。

『少佐！ 助け……！』

「黙って逃げてろ！」

ザクは青白い光を背に背負うと、一機残ったゲルググを救援すべく朱黒い塊となって猛進した。モノアイと頭部が白く輝き、残光が噴射炎と共に長い尾を引く。

「こっちだチキン野郎！」

腰の後ろに互い違いに付けていたシュツルムファウストを、左のマニピュレーターで掴む。安全装置解除、測距及び照準補正省略、モノアイからの画像のみの照準で敵機へと叩き込む。発射筒を投げ捨てると、続けてもう一発。

二発の弾頭は化学ロケット特有の炎とガスを噴いて敵へと突進する。

だが、当然ながら弾速は遅い。無重力では物体は直進するとはいえ、無誘導兵器が当たる距離ではない。

だが、敵機の注意を引きつけるには十分だった。

「ベルガー伍長！ 母艦と一緒に逃げろ！」

『りょ……了解！』

敵が反射的に行った回避行動のうちにゲルググとの射線上に割り込み、右マニピュレーターのマシンガンで段幕射撃、敵が姿勢を崩すのを見届けると弾倉排出、直ぐさまリロード。初弾装填確認、ザクの左腰に残った予備弾倉はあとひとつ。そこまで反射的に身体が動いてから、気づいた事実には愕然とする。

「さて、どうしたものか」

目の前の敵機にマシンガンは確かに命中した。だが目視では損害を全く認められない。少佐の脳裏には、噂に聞いていた“新型”が浮かぶ。嫌な予感しかしなかった。射撃戦が駄目なら接近戦、と一瞬考えるが、ビームサーベルを持つ連邦機に対しては、ヒートホークしか持たないザクでは圧倒的に不利である。

不意に、通信機から着信音が鳴る。自動受信に設定されている通信機は直ぐさま音声スピーカーから流し始めた。

『聞こえるか、亡霊……チャンネルを合わせろ。4. 7. 0だ』

「その声は！」

驚きと、納得と、少佐はヘルメットのバイザー越しに、双方の思いが五分五分と言った表情を浮かべる。だが、その表情を消すと、音声のみの回線を繋ぐ。

「ソロモン以来だな。連邦の、<sup>Gray</sup>グレイ・<sup>Osprey</sup>オスプレイ小隊長殿？」

モノアイの拡大映像では、左肩に書かれたマーキングが確認できた、連邦では珍しくない、色と動物を組み合わせた部隊章、“<sup>Gray</sup>灰色の<sup>Osprey</sup>ミサゴ”がよく見える。

『オペラ座の怪人……貴様らがアフリカを土足で踏み躪ってから、我々がどれ程の苦渋を味わってきたか！』

「逆恨みも此処まで来れば立派なものだな。コロニーの自治権すら奪い、地上からのうのと宇宙を支配してきた。それを認めぬ限り人類は古き<sup>オールドタイプ</sup>地球民から抜け出せないのだ！」

既に次の手を打たなければならない。モニターに新たにウィンドウを開くと、ソルヴェイグに向けてメールを発信する。

『最早、議論しても無駄だろうな』

「議論か……お前とは酒でも飲みながら話したかったもんだ」

母艦から返信がメールで届く。手はずは整った。ゲルググの着艦も確認し、心の中で安堵の息を漏らす。

『戯言は相変わらずだな……だが、これでもう終わりにする』

敵の両眼が輝く、ビームライフルが射撃位置で固定されるのが見えた。

『墓碑銘ぐらいは彫ってやる。名前を聞こうか？』

「良い心がけじゃないか。覚えておいてもらおう」

自身のマシンガンを構え直す。機体に近・中距離射撃用対応を命じた。モニターが最適化され、不必要な情報は消去される。

「ヴァルター・<sup>Walter</sup>ダール<sup>Dahl</sup>少佐だ。宇宙移民<sup>スペースノイド</sup>の自治権を希求するジオン公国軍人である！」

『クレイトン・<sup>Creighton</sup>エイブラムス<sup>Abrams</sup>中尉だ。宇宙人め、……いくぞ』

モノアイが放つ独特の再起動音がコックピットにも響いた。

それが合図だった。二機は同時にメインスラスタを全開にし、戦闘機動へと突入した。推進剤の残光が何度も、何度も交錯する。

機体性能では連邦機が圧倒していた。何度もその出力でザクを捕らえようとする。しかし、モビルスーツを0076年から教導大隊で扱いつづけたヴァルター少佐にとって、モビルスーツとは、自身の手足の延長と同義であった。無駄を極限までそぎ落とした機動で、敵が優位を取るのを阻んでいく。逆に何度かマシンガンを叩き込むが、近距離ですら敵の装甲を幾ばくか削るのみである。

「畜生、MMP-80でこれか！」

連邦軍の最新型モビルスーツには、ザクマシンガンを受け付けない装甲のヤツがいる、とは聞いていた。その上、そいつには近接射撃すら通じなかったという、悪い冗談だと思っていた。だが、それは厳然と目の前にいた。

『“ガンダム”にマシンガンなど通じるものか』

「……ガンダム！」

やはりという思いがよぎる。連邦の白い悪魔<sup>ホワイトデビル</sup>などと噂され、ニュータイプだの何だのと尾ひれがついた<sup>プロパガンダ</sup>宣伝ですら、真実を含んでいたということを再確認せざるを得ない。

『亡霊は亡霊らしく……』

思考の一瞬の隙を突かれ、ザクの下方へ回り込まれる。モニターが明滅し警告音がけたたましく鳴る。

『あの世へ逝ってろ！』

縮退されたビームがデブリを巻き込んでザクの左腕を消滅させる。重粒子が左腰に付けていた予備弾倉をも灼き、そして誘爆させた。

「……クソ！」

左腕損壊、左腰アーマー可動部に深刻なダメージ、左脚部動力伝達パイプ損傷。左腰アーマー強制排除、左脚部動力伝達を補助系統に移行、AMBAC再調整、各部バランスチェック……完了。

次々と現れる警告ウィンドウを無視するように、背面にあるメインスラスタの推力を上げる。毒づく間もなく機体を回転させると、モノアイで敵機を捕らえる。相手のビームライフルが輝くのが見えた。

「あと少して時に！」

オートでのバランス調整が逆に機体を鈍らせた。無傷の右脚部のサブ・スラスタすら思うように制御できない。危うい所でビームを回避する。さらに、立て続けの二発を回避

したところで、戦場で数度しか感じたことのない、ひりつく感触が背中を撫でていた。

「オートなど！」

オート調整機能を無効化、同時に操縦桿を小刻みに動かす。途端に機体はバランスを崩すが、動きに任せての機動を行う。スロットルレバーを奥まで押し込むと、背面と右脚部のスラスターは、一度咳き込むような噴射をしたかと思うと、再び派手な噴射炎を上げた。

「そうだ、この機動だ！」

まるで制御不能な機体の如く、錐揉みしながら闇を舞う機体。だが、ヴァルターは理不尽な横Gの中、既に機体のコントロールを我が物にしていた。

『狂ったか！』

通信機の向こうから動揺した声が聞こえてくる。

「そう……見…える…かも…な！」

横ロールを続ける機体を駆ると、AMBAC機動も併用し、相手のビームを回避していく。弾数が心許ないマシンガンは、その長大な長さによって慣性モーメントを余分に発生させるが、ザクは逆にAMBAC機動の際にその慣性を利用していった。

頬肉がこそげ落ちるかと思うほどのGの中、サブモニターを睨む、拡大された宇宙図には、自機の向かう矢印と、もうひとつの矢印がじりじりと進んでいた。先ほどまで背中に迫っていた死神が遠のく気配を感じる。

『どこまで逃げる気だ？』

敵は、やはりこの戦争を戦い抜いてきた手練れである。通信から先ほどの動揺は既に消えていた。余裕すら感じる大推力が敵機を突き動かし、迫ってくる。

「……ずいぶん…と余裕…だ……な。その機体で直撃たった一発か？」

Gに翻弄されながら、それでも相手を挑発する。

『……どういう意味だ？』

「そのま…ま……の意味だ……この……下手糞！」

『良い度胸だ』

一瞬でも注意をこちらに向ければ、と悪態を吐いたものの、その程度で動揺する相手ならば、この戦場には居ないことに思い至る。自嘲しながら操縦桿を強く引いた。畜生、こっちは一発喰らったら終わりなのに、相手は随分と卑怯な機体じゃないか。まあ、だからこそペテンに掛けても良いかと思ったのか。

ああ、そうか、俺は戦争をしてたんだ。何時から決闘でもしてる気分……。

そう思った瞬間、ジオン公国軍少佐ヴァルター・ダールは、笑いとも叫びともつかぬ声を上げながら、機体を操縦する自分を感じた。そうだ、戦争だった。相手は倒すべき敵だった。

「坊主、戦争を教えてやる！」

そして、“もうひとつの矢印”は、遂に予定ポイントへと達した。

「ミノフスキー粒子戦闘濃度散布！ 帰りの分も残しておけよ！ 主砲、一番二番用意！ 砲術長！」

ソルヴェイグの艦橋では、副長が大音声を上げていた。戦闘中ではあるが、軍の慣例に

従い、ノーマルスーツは付けていない。

「了解！ 艦橋直上よりの通信良好。……おい！ 一番砲塔、出力絞れ！ 少佐ごと焼いちまうぞ！」

砲術長はモニターを睨み付けながら、艦内電話に怒鳴り始めた。指定されたポイントまでもう僅かである。

艦橋は慌ただしさを増していった。報告と命令と復唱が次々と交わされていく。

「距離2500！」

「両舷停止！ 以後は低温噴射のみを使用！ 絶対に気取られるなよ！ 対モビルスーツ戦用意！ 全周監視を厳となせ！ 奴の仲間が来る前に逃げるぞ！」

副長、テオドル・ワイセンベルガー中尉は、この状況に陥っても落ち着いている自分に、驚きを感じていた。敵は倒しても倒しても沸いてくる。だが、自分たちの方が生き残る、生き残ってみせると、まるで根拠のない自信が自分を支えていることに気づいていた。ルウム以来の艦長が、今、まさに前線で“白い悪魔”と戦っている少佐が部下に見せていた、あのふてぶてしさを、自分が演じなければならない。ソロモンの激戦をくぐり抜け、ア・バオア・クーの戦闘から必死で待避しようとしている時である。

「目標近づきます！」

「砲術長！ 右29度、目標、敵モビルスーツ！ 一発で決めるぞ！」

「了解！ 大砲屋の腕を信じてください！」

ワイセンベルガー自身も気づかないうちに、この限定された戦闘での“勝利”を信じかけていた。馬鹿な、既に負け戦で、敵は増援をいくらでも持っているのに、と脳味噌の半分が喚くのすら気にならない。——艦長の無責任な自信が移ったか。

その思考を自嘲混じりの笑みで飲み込むと、メイン・スクリーンを見つめた。

そこには“鮮明な”敵機の映像が映し出されている。このミノフスキー粒子濃度で、ムサイ級の観測精度ではあり得ない鮮明さであった。

『最大望遠です……これ以上は……！』

不意に回線に滑り込んだ弱気な声に、副長より先に、直接回線が開いている砲術長が怒鳴りつけていた。

「お前はそこで狙ってれば良い！ 俺が当ててやる！」

それから二言三言、砲術長が罵詈雑言を浴びせかけるのを待ってから、ワイセンベルガーは艦内電話を“お肌の触れあい通信”に切り替え、ゆっくりと口を開いた。

「直上のゲルググ、視界は良好だ。いいか、艦長を信じろ。この艦はそうやって生き延びてきた。大丈夫だ、お前はしっかり“見て”いれば良い」

『はい！』

いくらか自信を取り戻した声を確認し、受話器を置くと、副長席のモニターに目をやった。

艦外カメラが捕らえたゲルググが、しっかりと艦橋を掴んでいる様子が見える。その首元から長く伸びたケーブルが艦橋付近に接続されている。あのケーブルによって、狙撃モードにされたゲルググのモノアイからの映像が艦橋へと転送されていた。オーストラリアでは、ゲルググを使って多数の敵を狙撃で撃墜した猛者も居るらしい。

そして、その噂を裏付けるほど、ゲルググの装備したモノアイは“優秀”だった。さら

に、ザクからのレーザー通信が届く。

「ザクよりのレーザー通信良好！ 照準補正中……完了、副長！」

後は命令するだけであった。時間通り、指定ポイントへの移動が完了した。

「撃ち方はじめ！」

ソルヴェイグの主砲は、狙点を固定すると、目標への“狙撃”を開始した。

頭上から光が沸き上がった。

『何！』

驚きの声と共に敵機が回避機動を取ろうとする前に、ヴァルターは操縦桿を倒していた。

「此処にいてもらどうぞ！」

マシンガンを抱え込むような体勢を取ると、ザクの巨躯が敵モビルスーツへと突っ込んでいく。敵の動こうとした方向と正反対のベクトルを体当たりで与える。丁度、ガンダムがザクを抱きかかえるような形となった。

一瞬の足止めであったが、高速で飛来するメガ粒子の奔流を当てるには、其れで十分だった。

『……ッ！ 心中する気か！』

敵の声には答えず、ただ口元をゆがめた。酷く穿った見方をすれば、それは笑みにも見えただろう。

二機のモビルスーツを、光が呑み込んだ。ソルヴェイグの主砲、第一、第二連装砲塔から続け様に吐き出されたビームは合計六発。それが、ほぼ正確に、18メートルの巨体へと襲いかかっていた。

『センサーが！ ク……！』

相手の通信も途絶する。コックピット内は各種警告音が盛大に鳴り響き、遂に外部映像も、ノイズと共にブラックアウトした。外部センサ類も、ほぼすべてメガ粒子により焼き払われた。ただ、機体に伝わる衝撃だけが、着弾と、自身の“ペテン”が上手くいっていることを伝えていた。今頃、敵もこの“シャワー”を同時に浴びているはずである。

ムサイ級には、演習用の弱装ビームから、艦隊攻撃用まで、ビームの密度の可変機構が搭載されている。それを利用して、センサー系を全て焼き切るだけで済む——ザクの装甲でも辛うじて耐えきれぬ——メガ粒子砲での“狙撃”をソルヴェイグに要請したのだった。

丁度三回の衝撃が機体に伝わったとき、ヘルメットのバイザーを閉めると、ヴァルターは機体のコックピットハッチを解放した。

CG補正のない、灰色にくすんだ“白い悪魔”を肉眼で捕らえる。両眼は光を失い、彷徨うように手を動かさず、敵が哀れに思えるが、恐らく相手も追撃がないと分かれば、自分と同じ行動を取る。その前に決着を付ける必要があった。

「馬鹿め！ ビームは……囧だ！」

生き残ったスラスターを無理矢理稼働させると、敵機の背後へと回り込む。抱え込んでいたマシンガンは……無事であった。マニピュレーターがぎこちなく動き、敵のランドセルへ狙いを付ける。

「終わりだ！」

残弾を敵のスラスターへと叩き込み、敵を蹴り飛ばし距離を取ると、最後に銃身下部に

付いていたグレネードの発射トリガーを引く。

爆発は音もなく、ただ光とガスが広がっていく様子が観測されただけであった。戦果確認のために、爆発が収まるのを待ちたかったが、無理だった。既に“味方”が接近していた。

「ソルヴェイグは！」

直上を振り仰ぐと、既にそこには見慣れたムサイ級の姿があった。少しでも相対速度を合わせるべく、反対方向に機体を向けると、残ったスラスターを全開にした。後部モニターは既にノイズしか映さなかったが、少佐には先ほど目視で一瞬だけ確認したソルヴェイグが、その傷ついた艦体に鞭打ちながら迫り来る様が手に取るように分かっていた。

解放されたコックピットハッチ、その向こうにソルヴェイグが搭載するコムサイ II の先端部分が見えてくる。そして、連装砲塔が見えたところで、すべてを撃ち尽くしたマシンガンを手放すと、ゆっくりとザクの手を伸ばした。

ぐいと引っ張られる感触と共に、機体が緑一色の壁面に取り付いたのが見える。ヴァルターは、コンピューターをロックすると、コックピット備え付けのランドムーバーを取り出し、宇宙へと躍り出た。

ソルヴェイグの艦橋の真上に陣取ったゲルググが手を振るのが見えた。

艦橋の人影が敬礼するのが見えた。

それらに手を振ると、直ぐさま手近なエアロックに入り込む。ハッチが閉まると共に、空気が満たされていく。

壁に触れると、重力が感じられた。エアロック閉鎖確認と同時に艦が加速を開始しているのだ。エンジンの損傷だけでなく、大重量離昇機Heavy-Launch Vehicleから取り外して、無理矢理増設したブースターも点火しているのだろう、いつも以上の振動が感じられた。

誰も居ないエアロックで、一瞬だけゆるんだ気を引き締め直すと、艦内へと続くハッチを開いた。リフト・グリップを握り、揺れる艦内を移動する。全てが順調に——少なくとも自らの指揮する部隊は——推移しているように思われた。

無論、幻想に過ぎない。ジオン公国軍は、宇宙要塞ア・バオア・クーで決定的な敗北を期し、そして自分の指揮する中隊は敗走を続けている。全くの負け戦であった。

不意にけたたましい警告音と、喚くような副長の声が艦内に響いた。

『艦長どこです！？ 奴め追ってきました！ 艦橋へ！』

「畜生、このザマだ！」

リフト・グリップの速度を上げると、ヴァルターは艦橋へ続くエレベーターへと飛び込んだ。

彼が艦橋に到着したときには、全てが終わっていた。

「……本艦は離脱に成功しました。直援機のゲルググが身代わりに……」

副長が苦々しげにそう告げる。

メインモニターの状況が全てを物語っていた。

コックピットから下がごっそりと持って行かれた機体が、ソルヴェイグの艦橋をしっかりと掴み、虚空を漂っていた。右手には、ビームライフルが握り締められている。

「ベルガー伍長は……勇敢でした。接近警報と共に艦橋後部へと回り込み……迎撃を……」

「副長！ 結果だけ言いたまえ！」

珍しく棘のある物言いをしてしまったことに後悔しつつ、ヴァルターは艦長席へ収まった。副長の言葉が、まるで、自分が責められているような気分になる。いや、実際に責められるべき事態である。俺が殺したような……。

「は！ 彼の放ったビームライフルは、敵モビルスーツへ命中！ 撃退するも、本艦を狙った敵モビルスーツのビームを身代わりに受け、アルベルト・ベルガー伍長は戦死いたしました！ 敵モビルスーツの撤退を確認しております！」

やけくそにも似た副長の報告を受けた時、ヴァルター・ダール艦長は艦長席の肘掛けを握り締めていた。それ以上の感情の露出は、艦橋要員が注目している今、彼には出来なかった。否、してはならない行為であった。

全ての業を飲み込み、泰然とした顔を前に向けると、静かに命令を発した。

「総員に告げる。これより本艦は月へと向かう、アナハイム社のドッグへ」

既にアナハイム社の“社員”を名乗る者から接触を受けていた。ジオンの劣勢を悟り、落ち延びる先として彼らの言い分からすれば“亡命先”として、見返りがジオンの技術だということを隠そうとしなかった。月居住者の<sup>runalian</sup>拜金主義が、とも思いかけたが、今は手を握ったことに安堵していた。

たとえ何があろうと生き残らねばならない。それが、今、この艦長席に座る者の使命だからだ。

ソルヴェイグは、燃焼が終了したブースターを切り離すと、月へと進路を変えた。

月の陰から、刺すような太陽の光が漏れ始めた。

時に、宇宙世紀0080年、1月1日未明のことである。